犬目清水公園

いずみ

白と水を重ねて「泉」と書く。何故白なのか、石清水が白く見えるところからとか。

「漢字の起源」には「水おのずから出づるを泉と為す」とある。源流の最初の水は一滴に過ぎない、とは良く使われる表現である。

以前は、八王子の丘陵地からは多くの泉が湧き出ていた。今は住宅などの造成地が激増し、山里からの湧水が激減した。が、ここ井戸尻の泉は健在である。市内には、名水百選にふさわしい湧水や良水が沢山ある。

二十一世紀中には、レアーメタルどころか水戦争が起きると聞く。八王子市では、多摩川などから水を供給して貰い、現在は恵まれている状態であるが、尊い「泉」を汚さぬよう心から祈りたい。

五輪塔の現すところ地(方)水(球)火(三角)風(半球)空(宝珠)は、その訓かも知れない。

◇散歩のみどころ

遊水池が綺麗な清水公園から西へ、犬目道の脇道を出たり入ったり、凡そ六kmの散歩である。

犬目には北斜面にこぢんまりした神社が多い。今でも山間に湧き出る御手洗の泉を始め、甲明神、地蔵菩薩、観音山、百万遍供養塔、山祇神社、犬目学舎があった祥雲寺へ。多くの専門家を生み出した陶鎔小学校へと続く。

千人同心の斉藤家の長屋門を見た後、市内で一番古いとされる馬頭観音を拝見。更に庚申塔、熊野神社、御嶽神社、八雲神社へと歩く。そこから川口川の唐犬橋を渡り、困民党指導者塩野倉之助屋敷跡へ。ここには御嶽神社と地蔵尊が安置されている。次に、飯綱神社、市内でも数少ない将軍地蔵を拝した後、安養寺へ。寺内には塩野倉之助の石碑と墓が安置されている。必見。できれば山王神社をお参りし、散策を終わる。

①清水公園

犬目町一四三の二

犬目町の旧小字に井戸尻（いどじり）がある。明治三十年頃（一八九七）の地図を見ると、井戸尻の大湧水は、川口川に注ぐまで二百mの長い湧水川であった。

昭和二十年代まで、夏は付近の子供たちの遊び場になっていた。

昭和三十年代後半より、都市化の波をうけて、大学・住宅建設に伴う道路工事、川沿いの低地の埋め立て工事、川口川の改修工事などにより、大湧水群は地下に埋没してしまった。現在、その一部は清水公園として市民の憩いの場となっている。

工学院大学犬目校舎バス停

清水公園

②御手洗（みたらし）の泉

神社や寺院には、きまって御手洗所と呼ばれる場所がある。参詣の前に手を洗ったり口をすすいだりするための水を置いてある場所だ。御手洗という地名は、その昔附近に人々の信仰の対象となるものがあったものと考えられる。

下犬目の御手洗の泉は、加住南丘陵沿いの旧道から参道を北側に八十mほど登った左側にある。昔、渇水が続き、井戸が枯れることがあったが、この泉だけは枯れることがなかった。附近の村人達が昭和の初期頃まで、緊急時の飲料水として利用していたという。

直径一・五m位の円形の泉で、現在も脈々と湧き出ている。

御手洗の泉への道

現在の御手洗の泉

③甲明神（かぶと）

下犬目を東西に走る旧道の十字路をまっすぐ登ると、甲明神の石の鳥居が正面に現れる。明治の富豪関谷源兵衛（第七、八代八王子市長）が建立。

石段を登ると、狭い境内に四尺四方の拝殿がある。祭神は、前田・上杉軍の残した兜との伝承がある。

甲ノ原バス停附近の畑に甲明神の鳥居や御飯塚があったが、鳥居は昭和五十年頃、宅地開発のため神社の近くに移され、御飯塚は地名のみが残っている。

●天神宮

天神宮は、甲明神境内の西側に、鎮座している。

菅原道真を主神とする天神信仰は学識及び人格を敬い慕うようになり、やがて学問の神様として崇められるようになった。石祠には、四名の名が刻まれている。

杉の参道

甲の原バス停

社（やしろ）

甲（かぶと ）明神

天神宮（学問の神様）

甲（かぶと ）明神

④地蔵菩薩

下犬目の山裾の旧道、観音山の入口に地蔵堂がある。地蔵菩薩には、「下犬目村念仏講中　願主　須崎伴右衛門　安永二巳歳（一七七三）吉祥日」と刻字されている。

仏教でいう菩薩の一つで、観音と並んで民間に根強く信仰されている。

地蔵が子供の姿で現れたという話は「今昔物語集」などにみられる。

左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、人々を苦しみから救ってくれるという地蔵信仰は、現世での利益を求める風潮を生み出した。

●甲ノ原（兜ノ原）

新編武蔵風土記稿に「村の東の方なる畑なり、此処の甲の観音と号する堂ありしと、又この上に甲の明神の社ありと云う。そのわけは、詳かならず。天正十八年（一五九〇）加賀勢八王子城を攻めるとき、犬目村、川口村を放火せし由伝う・・」云々。

観音堂

地蔵菩薩

⑤観音山（稲荷神社・三峰神社）

旧道から民家の間を少し登ると観音山に出る。山上の拓けた一角には昔観音堂があったと伝えられている。東側に稲荷神社、西側に三峰神社の小祠が並んでいる。観音堂にあったと伝えられる観音像は、現在、安養寺境内に安置されている。

●稲荷信仰

日本でもっとも広く信仰され続けて来たのが「稲荷」である。

稲荷詣でのことは「今昔物語」に「稲荷ニ参テ、百日籠テ、祈願スル」とある。その稲荷とは、京都の伏見稲荷大社で、身分を超えて人々が詣でるという点に、稲荷信仰の大きな特色がある。全国の神社の三分の一は稲荷神社である。

本来稲荷は、五穀豊穣を祈願する田の神であったが、現在では商売繁盛の神、商工業の守神として信仰を集めている。

扁　額
正一位稲荷大明神

●三峰信仰

三峰とはその名のとおり、本来三つの峰よりなる霊場で、雲取山、白岩山、妙法ヶ岳の三山である。

三峰の信仰は「お犬様」の信仰でもある。参詣者や信徒の中にも「三峰様」即「お犬様」と思い込んでいる人が多い。お犬様とはつまり「狼信仰」で、特に江戸時代、この信仰が盛んになり、多摩地方はもとより関東一円に広く伝播し、各地に三峰講が広がった。

留守の家を、盗難から守り、火難を防ぎ、作物をあらす害虫には、お札を割竹にさして畠にたてておけば虫がつかないといわれた。

⑥百万遍供養塔と地蔵菩薩

供養塔は正面に蓮の花、その上に二十四字の梵字（ぼんじ）を円形に配し、左側面には「武州下犬目村女講、天明六丙午中（一七八六）季九月如意日」と刻んである。

地蔵は昔から、かわいい小僧の姿で現れるとされており、特に子供を守ってくれる菩薩として、親子ともどもに親しまれてきた。

地蔵尊の前に小石を積んで、子供の遺品や好物などを供える風習がみられる。

百万遍供養塔

百万遍供養塔と地蔵菩薩

●百万遍の念仏について

「百万遍供養塔」は、全国にわたって分布している。

信仰の内容は、「南無阿弥陀仏」を百万回唱える念仏行事で、成就するとその証しとして、供養塔を造立するという。

その行法には二通りあり、その一つは、一人が日を限ってその期間に念仏を百万遍唱える行法。二つめは、百または千個の大型の数珠を、念仏講中が車座になって「ナムアミダブツ」を一唱するごとに一つ繰り、総計が百万回にいたれば諸願成就に到達する行法である。

念仏とは、仏を念ずる、もしくは口称して自らが解脱往生する手段であった。しかし、江戸時代、念仏講が農村で広く行われるようになると、葬式のみでなく虫送り、厄病除け、悪霊退散などの呪術的色彩が強くなった。

●「念仏講」村人の集い

念仏講は、念仏講中と呼ばれる集まりで、おもに婦人の集まりである。

その規模は、集落の大小により一定ではないが、十戸から二十戸を普通としている。

先祖などを供養するために、仏壇のある部屋で、音頭をとる人が鉦をたたき、人々は車座にすわって長い数珠を順々にひざの上で繰りながら「六字の名号」などの念仏唄を唱えた。江戸時代の中・末期から明治・大正期にかけて、ほとんどの町で、月並念仏が行われていた。

念仏講のなごりを残すものとして、葬式が終った夜、近隣の者と親族等によってお念仏（葬式念仏）をあげる習わしになっている。

三十分から一時間ほど念仏を唱えた後、ちょっとした茶菓子のもてなしがあり、古くは数少ない娯楽の一つでもあった。

しかし近年、都市化の進展に伴い、転入世帯の激増と共に住民の生活と意識も変わり、まだわずかに残っている念仏講や代参講も年々減る傾向にある。

●念仏講碑と葬鐘

高尾街道沿の旧小名、谷戸から右折して加住方面へ向かう旧道の片隅に、念仏講碑がある。明和年間（一七六四～七二）建立の念仏講碑で、念仏講中「中犬目」と銘記されていた記録が残されている。しかし現在、碑の上部が破損してなくなり、その下部のみ残っている。そこには念仏講の文字をかすかに読みとることができる。

なお、昭和三十一年二月、新たに谷戸念仏講碑が、講中氏子有志に依り旧碑の傍らに建立された。

また、古くから葬式の進行を広知した葬鐘がある。この葬鐘には、天明年間講中と銘記されている。

谷戸念仏講碑と地蔵尊

⑦山祇（さんぎ） 神社（山ノ神）

下犬目の山沿いの旧道を少し入り、谷戸田を左に見ながら右側の山道を四十ｍほど登ると、山の中腹（小字二ノ谷）に、山祇神社の拝殿がある。間口一間、奥行き一間半の新しい建物である。薪や炭焼きが行われた時代に、村人たちが山の繁栄と仕事の安全を祈願したという。

山祇神社

⑧神明（しんめい） 神社

下犬目旧小字、堂ノ下の旧道より二十ｍほど入った丘陵の中腹に、神明神社がある。

各地に、伊勢の神宮を勧請した社が創建され、現在では、天照大神をお祀する神社は、全国的な規模の国民信仰を形成している。

神明神社

内　宮

⑨祥雲寺跡

宗派　曹洞宗戸吹桂福寺末
本尊　薬師如来
開創　年代不詳
　天保年間（一八三〇～四四）本堂消失、往時を偲ぶものは薬師堂だけである。

歴代住職の印塔墓

祥雲寺跡

祥雲寺跡　地蔵菩薩

⑩陶鎔小学校

犬目町五十六番地

　明治七年（一八七四）に、陶鎔小学校の前身である犬目学舎が祥雲寺に、楢原学舎が念西庵に、それぞれ開設された。
　その後、明治十年（一八七七）前二学舎を合併し、陶鎔学校とした。
　校名の陶鎔は、戸長青木鎮郷、副戸長小野珍制が命名。人格を錬磨し陶冶する意を以て名付けられたといい、明治十二年（一八七九）公立学校となる。
　昭和三十年（一九五五）四月には、八王子市立陶鎔小学校と改称。昭和五十一年（一九七六）市立楢原小学校を併置し開校、同年八月、楢原小学校は新校舎落成により移転。
　昭和五十二年（一九七七）創立百周年記念行事を行った。

●地蔵尊（道しるべ）

高尾街道を戸吹方面へ向い、中犬目の信号を過ぎて大きく右にカーブする処の右側に、宮下・青梅に続く旧道の入口がある。その辻隅に鎮座して道しるべを兼ね、旅人の健康と安全を祈願したのであろう。

当時の旅人の情景が思い浮かぶ。

しかし、近年の都市化に伴う道路拡幅工事のため移され、現在は陶鎔小学校の北門に保存されている。

陶鎔小学校

道しるべの説明板

道しるべの碑

齋藤氏宅 庭角の地蔵尊ほか

新築の千人同心長屋門
（齋藤氏宅）

⑪馬頭観音

川口川の明治橋際に、馬頭観音がひっそりと鎮座している。今は年号を読むことはできないが、元禄四年の作で、八王子でも最古の馬頭観音だという。

昔は、人間の生活に深い関わりを持つ動物として、馬が日々の暮しの中に密着していた。

重要な働き手であった馬の無病息災を祈願したり、亡くなった馬の冥福を祈るために供養塔を道端に建立したのが、馬頭観音信仰である。

馬頭観音

馬頭観音

⑫庚申塔（西川原）

江戸時代、犬目村の高札場のあった旧小名川原に、元禄時代の文字庚申塔と青面金剛が並んでおり、次のような刻字がある。

「武州多摩郡小宮領犬目村願主講中、二十二人　元禄六年（一六九三）酉九月十九日、修復造立　寛政五癸丑年（一七九三）十月二十二日」

青面金剛は元禄六年に造立され、その百年後に修造されると同時に、文字庚申塔が作られている。

庚申塔と地蔵菩薩

庚 申 塔

⑬熊野神社

鳥居をくぐり急な階段を登ると、境内の正面に拝殿がある。

拝殿は間口三間、奥行二間、さらに二間の覆堂がある。覆堂に鎮座する本殿は、四隅の柱上、柱下共に、龍と狛犬の彫物、三面の壁にはそれぞれ異なった彫刻が施されている。

石段手前の灯篭には、「奉献御神前、寛政三辛亥歳（一七九一）九月吉祥日、武州多摩郡犬目村施主氏子中、惣氏子他四人」と刻まれている。

熊野神社

見事な彫刻

熊野神社殿

⑭犬目会館

犬目町八六三

犬目会館

⑮ 御嶽（みたけ） 神社

祭神　日本武尊
創立　不詳

旧小字、堀西の残堀川を渡り正面の石段を登ると中腹の五十坪ほどの境内に、間口二間　奥行一間半の拝殿があり、二間四方の覆堂に本堂がある。

御嶽神社は犬目村の村社として地区内最大の氏子を抱えている。

昭和三十年代中頃まで、村内会や青年団を中心に毎年四月八日、盛大な祭礼が行われた。

慶応二年（一八六六）社殿を焼失したが、その後再建している。

扁　額

御嶽神社

御嶽神社奥殿

●千鳥新太郎劇団

戦後八王子に生まれた地方劇団。昭和二十三年（一九四八）頃、戦禍により荒廃した八王子に千鳥新太郎が結成した劇団で、国定忠治、一本刀土俵入りなど、任侠・また旅ものを得意とし、当時の庶民の人気を博していた。

八王子を中心に、近隣周辺を舞台に、祭礼、縁日などで活躍した。特に、犬目・御嶽神社の祭礼での芝居は大人気であった。

昭和五十六年（一九八一）一月二十九日、座長の千鳥新太郎（本名内田義雄）の死去により、一時代を終えた。その後、関係者により千鳥劇団として継続しているという。

ポスター

千鳥新太郎
（内田義雄）

三 度 笠

刀

絵図の左には芝居小屋が

⑯八雲神社

拝殿は間口、奥行とも二間で覆堂がある。

八雲神社は江戸時代まで牛頭天王（ごずてんのう）社とよばれていた。京都・八坂神社も牛頭天王社ともいわれ、疫病退散や邪気祓いに効験があるとされている。

牛頭天王社は明治以降八雲神社と改称され、同時に祭神も、それまでの牛頭天王から須佐之男命に改められた。創立年月日不詳。

八雲神社

拝　殿

⑰塩野倉之助屋敷跡

川口川の唐犬橋を南方向に渡り直ぐ右へ曲がる狭い道がある。突き当りが塩野倉之助の屋敷跡である。

屋敷跡には御嶽神社が奉られ鳥居の前には立派な「困民党指導者塩野倉之助屋敷跡」の石碑が建立されている。また正面の右側には庚申塔と思われる石碑と地蔵尊が安置されている。

倉之助屋敷跡碑と御嶽神社

屋敷跡の地蔵尊

⑱大六天神社・飯綱（いいづな）神社

飯綱神社は上犬目の中原にある。石の鳥居を入ると、間口二間奥行三間の拝殿があり、拝殿には「お日待」の炉が切られている。

社内には「当社再建の棟札存在し処、明治十年八月、乞食非人等夜宿し、右棟札を採り集め、焚物として終に焼失せし、その時の札には、明治元年五月、別当犬目山安養寺と之有候、後后の為一筆寸言記載申置く事上犬目村中原氏子中社掌敬白」とある。高尾山ゆかりの神社で安養寺の別当であった。

ちなみに、「お日待」とは、特定の日に村内の同信者が集まってお籠りをすること。とりわけ庚申、甲子、巳の日などのお籠りは、古くからの伝承行事で、この日は仕事を休み精進料理を食べるならわしがあった。

大六天神社・飯綱神社　　八雲神社拝殿

●遺跡　原中

上犬目・加住南丘陵の中原台地に位置し、南麓から東南東に向かって派出した舌状の台地である。台地上に散布する遺物は、主として縄文時代中期に属するものが、海抜百四十mの等高線に囲まれ、地域全体に広がっている。

部分的には、弥生式土器片、土師器片が認められている。

この台地が、本格的な研究の対象として、発掘調査されたのは昭和二十二年以降である。

勝坂式土器
都立武蔵野郷土館所蔵

顔面杷手付土器

⑲ 勝軍（しょうぐん） 地蔵

勝軍地蔵は、上犬目、安養寺近くの道路脇に安置されている。

火伏の神として崇められ信仰されている愛宕（あたご）神の流れをくむもので、室町時代後期には、これを尊崇すれば必ず勝利を得るとされていた。

その本地仏を「勝軍地蔵」とし、これを愛宕大権現と称し、武門守護の神として武家から崇敬されていた。

権現様と勝軍地蔵

武将の面ざし

⑳犬目山 不動院 安養寺

宗派　真言宗智山派
本尊　不動明王
寺宝　位牌堂の阿弥陀如来像
　　観音堂の聖観音像
　　天神社、梵鐘、六地蔵
開山　頼鎮上人
開創　南北朝時代の永和年間
　　（一三七五～七八）

慶安年間（一六四八～五二）覚玄阿闍梨によって中興され、御朱印十四石五斗を賜る。文久三年（一八六三）に堂宇悉く焼失した。

現、堂宇の建立年代は不明。客殿は弘法大師一一五〇年御遠忌（昭和五十九年）の記念事業として建立。

本堂前に立つ弘法大師像は御生誕一二〇〇年を祝い、興教大師像は大師八五〇年の御遠忌に建てられたものである。

梵鐘は昭和の大戦に応召し還らぬ旧鐘を追慕して昭和三十九年に鋳造したものである。

安養寺本堂

●観音堂

下犬目の観音山から移された甲観音との伝承をもつ聖観音像が安置され、御厨子には天保十五年（一八四四）の銘がある。

梵　鐘

聖観音大菩薩

天神さま

●塩野倉之助の碑

川口困民党指導者。文政七年（一八二四）～明治四十年（一九〇七）十月一日、下川口村唐松の油屋と呼ばれた豪農の子として生まれる。

代々名主を務め、明治には質屋を経営している。村会議員をしていた明治十七年（一八八四）折からの松方デフレで困窮する村人がひよどり山に結集するや、仲裁人となるが、九月一日、警察の家宅捜索を受ける。九・五事件で逮捕拘留されている。

昭和二十九年（一九五四）四月、犬目の安養寺に、困民党首領・塩野倉之助の碑が建立された。

塩野倉之助碑

遠津御祖代々神霊
（塩野倉之助墓）

○山王神社

安養寺から少し西に行き、左の小高い丘を登った所に山王神社が奉られている。地元の人の安置であろう。

山王とは、滋賀県大津市坂本の日吉神社の別称。最澄が、大和国三室山の大三輪神すなわち大物主神を勧請したとき、中国の天台山国清寺の山王祠にならって神号を山王と奉り比叡山の守護神としたのに始まる。

◎参考資料

・犬目ものがたりその歴史と伝統　発行　遊佐順子　編集　奥村春夫
・新編武蔵風土記稿
・大日本地名辞典
・倭名類聚抄
・八王子寺院めぐり　八王子仏教協会青年部
・歴史と浪漫の散歩道　山王神社
・八王子歴史と文化
・八王子事典
・八王子市史
・八王子地名考
・武蔵名勝図会
・インターネット各ページ　山王神社祠
・昭文社
・八王子市地図
・八王子市観光マップ
・八王子市郷土資料館資料

メモ